

PHD LETTER

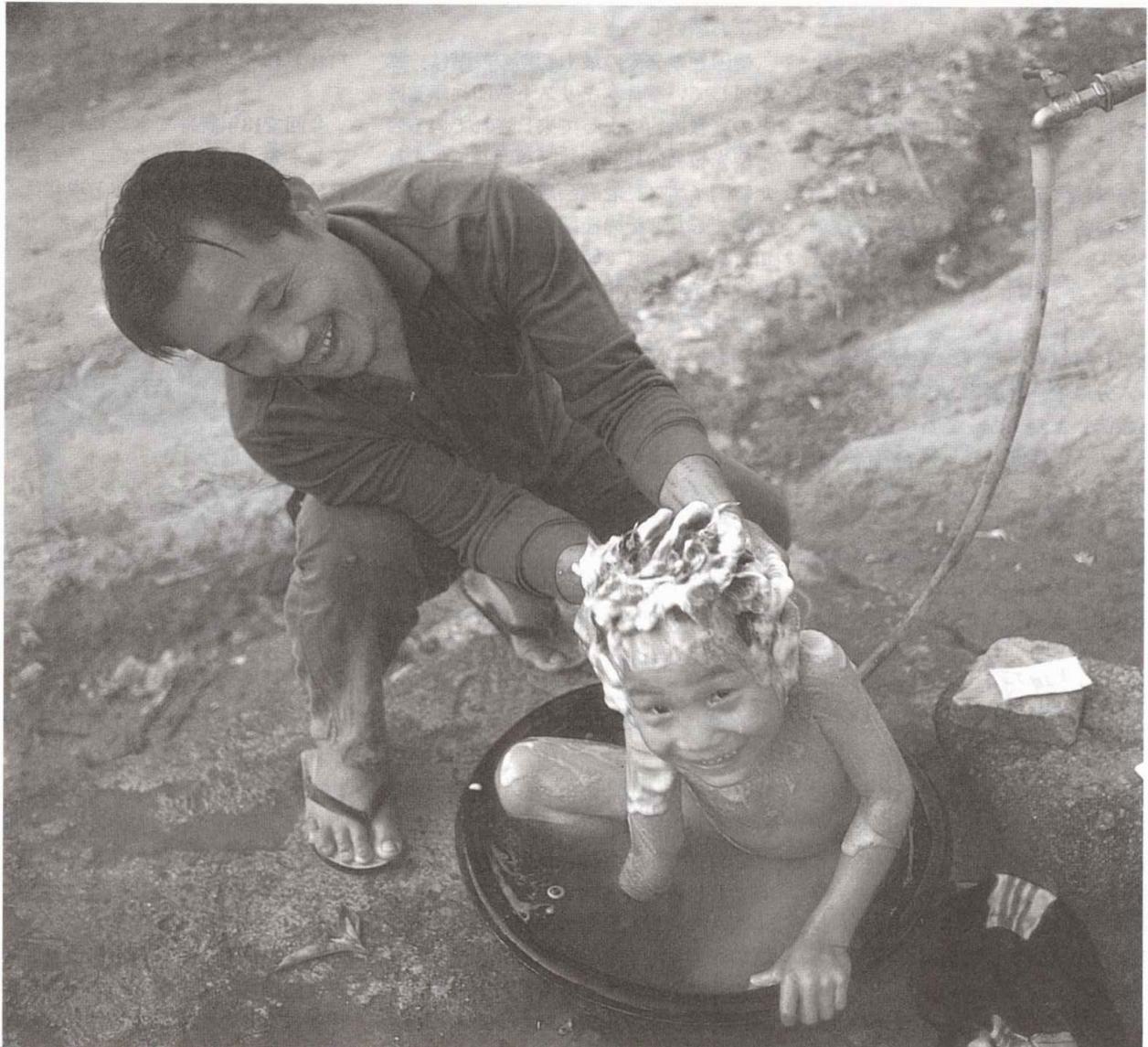
66

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1998・3

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

- ムシキーに電気がきた!!..... 3 P
- 新しい4人を紹介します..... 8 P

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：草地 賢一
住所：〒650-0022神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
定価：100円



タイ・メーホンソン県メフ村 撮影 FUJINO.T

幹線道路から約2時間、雨期には通れない
山道の行きどまりにこの村はあった。
電気はないけど、山の水をひいた水道が
村のところどころに。
陽が落ちて、寒くなる前にきれいにしようね。

草の根の人々を訪ねて

Report from Asia and South Pacific

去る1月31日から5日間、金大中次期大統領の就任を待ち望みつつウォンの下落に苦闘する韓国を訪問してきました。

まず日韓農民交流の拠点である忠清南道洪城を訪ねブルム一農業技術高校の洪淳明校長、「正農会」のメンバーと話合いました。

ブルム一農校は「土に根ざした人間教育」が最近の韓国教育界に評価され、4倍を越す志願者が殺到しているとのこと。また「正農会」は洪城支部の活発な活動を基盤とすることで韓国正農会の本部を首都ソウルから洪城に移すとのこと。

また韓国社会全体に大きな関心を引き起こしている「帰農運動」の代表呼びかけ人にブルム一の洪校長が就任しておられること、など嬉しい情報がありました。

加えてPHDの日韓農民交流を契機として、大分県の下郷農協、福岡県の「あいがも農法」との交流、さらにはその成果をベトナムに展開し、日韓の農民が現地を訪問し指導、普及しているとのこと。

私は約10年に及ぶPHDの農民交流がじわじわと成果を生み出していることに大きな感謝を覚えました。

帰国研修生の協力を得て3人を選考

海外出張報告 ～ ネパール、インドネシア、タイ

東日本研修旅行をはさんでの11月、12月に3つの国にでかけ研修生の選考とその準備をしてきました。

まずネパール。カトマンズに着き、帰国研修生ビショジョティさん(95年)、ニーランさん(85年)に会った後、選考地ポカラへ。

ここにはラダ・パンストーラさん(83年)が居り、編物のグループによる活動がすすまられています。97年度はここからサビトリ・シュレスタさんを研修生として日本に迎えています。彼女に続く人材を選ぶのが今回の目的です。19才から26才までの6人の候補者と面接をし、全員の家庭を訪ね、家族とも会い、サビトリ・バストーラさんに決定しました。

カトマンズに戻り、数年ぶりのサンバさん(83年)にも出会えました。西ネパール、ダイレクで小さな診療所を開き、村の人たちの健康のために働いてい

韓国との交流をふりかえって

今後もしばらく途絶えているアジアからのPHD研修生を洪城に迎えることの復活など、さまざまな提案を得ました。

洪城からソウルに戻り、韓国YMCA連盟の李南周総主事を訪問しました。この交流を現在の形につないで下さった人です。中国の故周恩来首相に倣っていえば、井戸を掘って下さった人に約10年になる交流の成果と今後の支援をお礼とともにお願いしてきました。

韓国との交流の最も初期の段階は、私が属している日本キリスト教団兵庫教区との宣教協約によって来日されている西宮聖光教会の朴敬和牧師を通じて生まれた韓国イエス長老教会農漁村開発部との交流でした。その後関西NGO協議会平田哲議長を通じて韓国キリスト教産業開発院の趙牧師に紹介され、忠清南道禮山の農業者と交流します。さらにその後、韓国農村YMCAを通じて現在の洪城の人びとにつながっていきます。

このようにアジア・南太平洋各地の現在の交流先とともに、ひとつの交流拠点が定まり、しかもそれが定着し交流の成果が生み出されてくるには試行錯誤を経て相当な時間が必要となるのです。

ネパールのチャンネルはPHD運動の提唱者岩村先生が開いて下さいました。

インドネシアのそれは岩村先生と当時の淡路島五色町の斎藤貢町長の出会いが端緒になりました。

タイでもビルマでもスリランカでもその他すべてのPHDの交流先はこのように「熱いおもい」を持った人との出会いがそのきっかけになっています。

スタッフとしての私の働きはこれらのひとつひとつの「熱いおもい」をていねいにつなぎ、そこから「志」を築くことでした。私はその働きを誇りに思っています。

今回で13年続けてきた私のコラムは終了します。いずれ、このコラムを中心にPHDの交流拠点の生成と現状については何らかの形でまとめる予定です。

長い間のご愛読を感謝します。

総主事 草地 賢一



正農会からの感謝状

ます。最近では近くの町の公立病院で検査技師もしているそうです。バート・ピスタさん(82年)とは、彼のグループSSSとPHDとの共同プログラム、ネパール国内での村人対象の開発ワークショップの可能性を話し合いました。

12月に入ってすぐ、今度はジャカルタ経由でインドネシア、スマトラのパダンに入りました。煙害はひとまずおさまっていました。この地域のパイプ役、アンダラス大学教授シャリフ・アリ先生と打合わせ、ハスマヤニさん(92年)に通訳を兼ねて同行してもらいふたつの村を訪ねました。99年度の研修生をスマトラの農村から迎えるための調査が目的です。先に訪ねたスコレジョはジャワ島からの移民の村。もうひとつの山の村タベは政府によって貧しいとランク付けされているところ(このランクをIDTという)。このIDTは西スマトラ州全体で

約千あるそうで、村でのインタビューでも農業、保健衛生等の面に多くの問題を抱えていることがわかりました。今回の調査を元に98年の再訪問で、新しい研修生招聘地域を決定します。

スマトラから一旦日本に戻り、続いてタイにはスタディツアーの引率を兼ねて出かけました。手織物の仕入れと98年度研修生の人選と、北タイのチェンマイ県、メーホンソン県のカレンの村を訪ねました。プリチャーさん(85年)がすすめる地域開発の活動の軸になる人材をと、97年度にアンボンさんを招いていますが、さらにこの地域から2人の農業者プラチャクさんとサワンさんを5人の候補者の中から選んできました。

主任主事 藤野 達也

ムシキーに電気がきた!!

第14回タイフォローアップ&スタディツアー報告

日程：97年12月23日～98年1月2日
行程：大阪～チェンマイ～ポッケオ村～ムシキー村～チェンマイ～メフ村～ドオーイ村～チェンマイ～大阪
この時期恒例のカレンの村への旅、研修指導者も加わり21名の参加で行いました。

今回の旅は、一般的に言われるタイのイメージ、その多くはバンコクのイメージだが、そういったイメージとは程遠いものだった。したがって、私はいつも、タイへ行ってきたと言うのではなく、カレンの村へ行ってきたと言っている。

つちだなおこ (土田直子・長岡市・大学勤務)

ポッケオではいちご畑など農場や診療所の見学をしました。

研修生コマさん(87年)の一言が気になる。いちご栽培が村に広まって、たしかにお金が入るようになった。けれど忙しくて大好きな狩りにも行けなくなった。「ここはハッピーじゃない。」

おぼたかずたか (小幡一隆・大和市・公務員)



ポッケオの村の診療所にはコンピュータが入ってビックリ!

プリチャーさん(85年)の紹介で出かけた山の村メフ。私達が行った村のなかでいちばん田舎で、私達がいちばん初めに訪れた外国人だったそうです。

メフの村でたんぼを見学させてもらっていて、「この時期に畑で野菜つくれすよ」と言ったとき「忙しくなるから作らない」というようなことを村の人が言っていたこと。『忙しくなるならやらない』なんていう発想は、私にはなかった。モノがあふれている日本に住む私は、モノがないカレンの村で『豊かさ』を感じた。時間の『豊かさ』を感じたのだと思う。 かくちえみ (角地絵美・大阪市・学生)

最後の村、ドオーイ。かなり裕福だっ

た。先までの村とそれほど離れていないのに、「この差は何?」

年越し。ある家に集合。何か興ざめしてしまった。映りのいいTVやゲームボーイまであった。このがっかりは、私たち日本人の傲りなのだろうか。豊かになっていくとともに、素朴な『村』じゃなくなっているドオーイ村に魅力を感じなくなる私達は、結局『冷やかし』の観光客でしかないんじゃないか。

やまかあきこ (山香明子・大阪市・フリーター)



ワラヤさんの通訳で面接はすすむ

東北から合流したワラヤさん(88年)の通訳で次期研修生の選考をしました。

候補者の皆が本当に真剣に生きておられる姿に胸打たれました。日頃、私は楽しい人生を過ごしたいと思い、好きな事を選び、のんびり暮らしたいと考えて居ましたので、すごいショックでした。

さとうまきよこ (佐藤公羊子・岡山市・主婦)

開発が進めば、その代償として伝統が失われます。そのバランスを村人たち自身で決めたのなら、私達は村が開発によって変わっていったとしても何も言う必要はないと思うのですが・・・。何も知らないカレンの人々はテレビなどで開発の良い面だけを見せられそれを追い求めようとしています。

はしもとさきこ (橋本早英子・箕面市・学生)

この旅を通して、国際協力は何なのか、どんな関係を築いていったらいいのかなど改めて考えていきたいことがいっぱいできた。そして、どうしていったら一番良いのか、何を望んでいるのか良く話し合うことの大切さを感じた。

かつめくみ (勝恵美・名古屋市・学生)

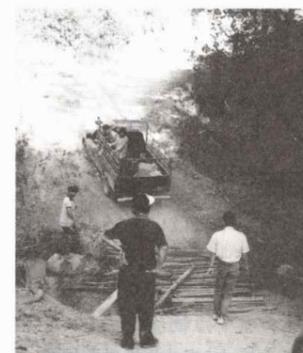
現在の日本は、強い経済力によって世界各地から食料を輸入し、人々は無感動に食い散らかしています。ODAのプロジェクトの中には安い労働力によって日

本の消費者向けの農産物を作らせ、村人たちの生活を以前よりも悪くしてしまった例もあります。リスクを負うのはいつも途上国の農村になってしまっている。途上国の農村開発を進めていくと同時に国内では日本の農業を大切にするような農政への政策提言等を我々農業に関わる人間がしていき、自給自足のできる農業を目指す必要があるのではないのでしょうか。 いいひろし (石井博・鹿児島県・団体職員)

日本に帰ってきて——訪ねた4つの村は日本の私の暮らしに比べると、明らかに貧しかった。とくにメフ村の人達は、住む家と、最低限の着るものと食べるもの、そしてそれらを作り出す道具以外は何も持っていないといってもよかった。村の暮らしは不便ではあるが、見方によっては「丁寧に暮らしている」ともいえると思う。

旅を終えて私は、便利になった上に、さらに手軽さ・快適さばかりを求めてきた自分の生活を、もう少し手間ひまをかけた丁寧な暮らしに変えていきたいと思うようになった。

いしかわてるこ (石川照子・神戸市・教員)



丸太の橋が壊れて大変メフへの道

教えている高校生にツアーの体験を話した。日本は若者が夢をもって生きる事の難しい国なのだということを思い知らされた。「何でもできる」日本でかえって、「何もできない」という無力感を感じて孤独に生きている若者がたくさんいるような気がした。

改めて「生きる」ことも「よく生きる」ことも大変なことだなあと感じた。でも、せつかく生きているんだから頑張ってみるか、という気持ちを持つことができた。

さわだまきこ (澤田雅子・宝塚市・教員)



「3年ぶりにタイツアーに参加しました」

プリチャーさん(85年)のいるムシキーから女性たちの織っている布をスタディツアーで持ち帰り、布を通しての交流を始めてもう8年。いくつかの課題に対し、始まったばかりだから・・・という言い訳は通用しないくらいに歳月を重ねてきた。



メサリアンのグループと

毎年年末のツアーで村を訪問し、グループの人たちと顔を合わせての会合、そして布の買付け。プリチャーさんというキーパーソンを間に言葉も不自由せずにやり取りを続けてきた。

※「ソディ」とはカレン語で卵の意味。布を通して村の人を支援するグループです。

～バザーパワーアップ パート2～

“物品販売がなぜ国際協力なの?”と思われる方も中にはいらっしゃるかもしれませんが、物品販売はアジア・南太平洋の草の根の村づくりにつながっているのです。まずは物品を通してPHDの活動を多くの人に知ってもらうことができます。そしてその収益を研修事業に役立てることができます。

昨年、多くの方々に、バザーに参加していただいたり、品物を買っていただいたりしました。しかし、もっと多くの人たちにPHDの活動を知ってもらいたいアジア・南太平洋の草の根の人々に関わってもらうためには、もっと工夫や改善をしなければいけないのではと考えました。そこで昨年秋、バザーや物品に関するアンケートをとり、たくさんの人たちからいろいろ提案や問題点をあげていただきました。

また、『PHDの物品販売を考える会』を職員とボランティアとで持ちまし

彼が別の地域(メラノイ)に移り、ムシキーとのやりとりはどうなるのだろうと心配したが、杞憂に終わった。ムシキーと交流開始の直後からメサリアンへも91年、92年の春と訪ねてきた。プリチャーさんに続く人を研修生として迎えるため選考もこの地域からすることになり、96年年末のツアーからムシキーとともに訪問し交流、買付けを行っている。

ムシキーでは2ヵ月前に電気が入り、そのことによる様々な生活の変化を村人自身が、発展(development)と受けとめ、便利になってうれしい部分と今まではある種一線を画していた「自分たち」という強みが知らないうちになくなってしまふのではという不安な部分の両方を感じているといった様子だった。

また、ムシキーには97年3月から王室による村落開発のプロジェクトで機織り機(高機)が持ち込まれ、化学染料の糸で織る賃労働が入っていた。手織布のグループのメンバーでそれに加わる人もいた。これは今のところ、ソディが扱っている草木染を主とした手織りの布の活動とかち合うことはないようで、またグループとしてはそれはそれで結構という。

布の品揃えは、この1年でやりとりする中で出ていた、新しい大きさのもの

(カレンらしさを伝えることのできる)カバンが作られていた。加工については自分たちは苦手だから今のところはしない、との答え。

メサリアンのほうは、町に近いこともあり、ムシキーとは随分と雰囲気が違う。ミシンがあり、リュックやジャケットも作るなど、製品加工は町で講習を受けるとかで結構上手。また色々なものを作ってみようという意欲あり。グループの中で染める、織る、加工するの工程を分担していて、グループの活動の仕方がムシキーとは違う。

こちらのグループとは、まだ直接手紙でのやりとりをしておらず、今後どうなっていくかだが、ムシキーとメサリアン、ふたつのグループはそれぞれに特徴があり、得手不得手がある。今後もそれぞれの良いところを伸ばしていくお付き合いができるといいなと思う。

小松 みち



新入荷の布

た。

まず、私たちの売る物品が必要以上の消費をおおっていないかとか、上記のソディーの扱う布の場合、私たちが支援しているかと思行っていることが、彼らにどのような影響を与えているかなど、PHDの活動の中で物品について考える時に根本的ともいえる事柄について考えました。これらの点については、これまでも慎重に考えてきました。

例えば、Tシャツの質を落とし、1000円で販売すれば、買ってもらうやすいし宣伝にもなるかもしれません。でも、そのために2、3回洗っただけで伸びてしまうシャツでは、私達が研修生と出会う中で感じ、皆さんにも伝えたいと思っている“物を大切に、無駄なモノをなくす”ということに相反するように思っている、今の素材を選んでいきます。今後もうこういった姿勢は大切にしていきたいと思っています。

大西 緑

いつもと違う時間が流れる

去る11月7・8日、兵庫県多紀郡丹南町大山にて、第7回林業体験学習「枝打」(共催:大山振興会、協力:兵庫県多紀郡丹南町、篠山林業事務所、ウータン・森と生活を考える会)を実施しました。今回は7月の下草刈りに続き今年度2回目のプログラムです。今年は研修生の参加はなかったものの、日本とアジア・南太平洋を林業を通して結び、考えることができたように思います。

今回はボランティアスタッフの芳田裕二さんの報告です。

総勢二十名で参加した今回は、素晴らしい環境の中で開催できました。実技の指導から講義にいたるまで、丹南町立四季の森会館の皆様をはじめ、大山振興会、篠山林業事務所、渡辺省悟さんなどの皆様に大変お世話になりました。地元、大山の方々のご厚意にお応えするには、森林の果たしている地球環境に対する大きな役割や、日本の林業の持っている問題点、それから大山の林業、地域の素晴らしいさを少しでもたくさんの人に

知っていただくことかな、なんて考えています。

私が、初めてこのプログラムに参加したときに、森の中で作業をしてひとしき



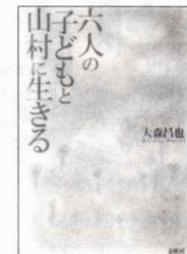
り汗をかいた後、急な斜面にへたりこんで気持ちのいい風に吹かれながら、自分の体のなかにもいつもとは違う、ゆったりとした「時間」が流れていくのを感じた、そのことがいまだに忘れられません。産業革命以降をとっても、たかだか二百年そこそこ。何万年もの年月をかけて、人はこの地球の環境、草原と森林の

中での生活に適応するように、念入りに調整されてきています。でもこの二百年そこそこの間での人の生活環境の変化は、あまりにも大きく、激しすぎます。

そして、「枝打」を通して強く感じるのは、今流行の「市場原理」だけでは、森も林業も守れない、成り立っていかないということなのです。

なかなか大きな問題で、一人の力では抱えきれないことですが、このプログラムの中で、少しでも多くの人と一緒にそんなことも考えていけたら素敵だなと思っと思っています。森の中での作業だけではなく、これからは製材所の問題、流通の問題、建築現場や新しい木材の使い道の問題、そして日本の林業と世界の森林破壊との問題など、いろいろな切り口でこの「枝打」を続けていけたら素敵だなと思っっています。

BOOK REVIEW



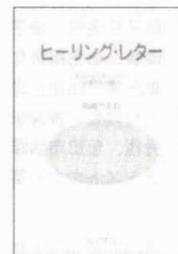
「六人の子と山村に生きる」

¥1500

麦秋社

大森 昌也

パプアニューギニアからの研修生レル・サバさんが90年に研修にいかせてもらってからのおつきあいの大森さん。研修生だけでなく事務所のボランティアも時々出入りさせてもらっています。過疎の村から見える現代とは、都市とは? 百姓大森さんの問いかけをご一読下さい。



「ヒーリング・レター」

¥1800

近代文芸社

福崎 やすお

研修旅行受入先のおじさんと少女とのひよんなことから始まった手紙のやりとり。学校のこと、社会のこと、生きることと幅広い話題。でも素朴なやりとりがあります。たとえ苦しいことでも、良い、正しいと思うことがやれて、それに自分が感謝できるようになることが自己実現のひとつかもと福崎さん。



「地域をひらく国際協力」

¥1800

大学教育出版

田中 治彦編

西日本研修旅行での交流先としておつきあいのある南北ネットワーク岡山の活動が一冊の本となりました。編者の田中治彦さんをはじめ顔なじみの米良重徳さん、鬼木のぞみさん、小林美美子さん、小川輝樹さん、高木唱洋さんそして元職員逸見広心さんの文章も。地域から国際協力の活動を起こすヒントが沢山。



「タートル・ストーリー」

¥1800

理論社

樋口 千重子

88年度の職員、樋口千重子さんの児童文学デビュー作。少年と亀(タートル)の友情の物語。“タートルに合わせて歩いてあげていたと思っていたことが、逆に今まで気がつかなかった楽しさや豊かさを教えてくれた・・・”との一節はPHDの活動に通じるかな。

15 期 生

研 修 生 レ ポ ー ト

第7回日韓農民交流

アンボン・クルワンさん タイ

久保賢一氏(和歌山県南部川村)、山崎佳彦氏(有田市)ノ和歌山県海友会ノ東日本研修旅行ノ渡辺省悟氏(兵庫県丹南町)ノふえろう村塾(小野市)ノ広岡史郎氏(福岡市)ノ協同歯科(明石市)ノどじょう組合(京都府夜久野町)ノ西日本研修旅行ノ小野加工グループ(小野市)ノ加西農業改良普及センター(加西市)ノ一色作郎氏(市島町、以下共通研修ノ兵庫県農業協同組合中央会(神戸市)ノ本野一郎氏ノ神戸西農業協同組合(神戸市)ノ保田茂氏ノ神戸大学農学部(神戸市)ノ釜ヶ崎キリスト教協会(大阪市)ノ岩村昇氏(兵庫県三木市)ノ山崎佳彦氏(有田市)ノ和歌山県海友会ノ淡路島モンキーセンター(洲本市)、山口勝弘氏(南淡町)ノ兵庫県内研修旅行ノフィリピン比較研修旅行ノ帰国

ハリエオ・ゲオバさん パプアニューギニア

金谷昌高氏、智之氏(兵庫県大屋町)ノ東日本研修旅行ノ鳥取西部農業協同組合日野町支所農機センターノ笹間政典氏(鳥取県日野町)ノ協同歯科(明石市)ノどじょう組合(京都府夜久野町)ノ西日本研修旅行ノ(以下共通研修)ノ帰国



耕転機の修理について長尾さんから指導を受けるハリエオさん(日野町)

うことについても技術やお金だけで測ることはできない、同時に「平和」「健康」についても常に考え、自分たちの生活を守り、良くしたいと話しています。けれども、「便利さ」は多くの方が欲しいと思うものです。村人の多くが便利さやお金での豊かさを求めるようになったら、日本で学んだこと、感じたことを村の人に伝え、理解してもらうことは難しいのではないかと研修生同士でも話し合いました。ワニさんは村の人に一方的に話だけで教えようとするとうまくいかないかもしれないので、自分の家族の生活の実践から周囲の人たちが感じ取ってくれることを期待したい、と話しています。

サビトリさんの水俣についての感想を紹介します。(右ページ)

ワニ・ソミさん パプアニューギニア

原田富生氏(大阪府能勢町)、吉田吉彦氏(兵庫県水上市)ノふえろう村塾(小野市)ノ君塚昌俊氏(市島町)ノ協同歯科(明石市)ノどじょう組合(京都府夜久野町)ノ西日本研修旅行ノ小野加工グループ(小野市)ノ加西農業改良普及センター(加西市)ノ渋谷富喜男氏(神戸市)ノ(以下共通研修)ノ帰国



くん炭の作り方について学ぶワニさんとアンボンさん(小野市)

東日本研修旅行

敦賀南小学校(福井)ノ美浜原発ノ七寺・宝寿院ノアユス東海(愛知)ノ国際ソロプチミスト高山ノPHDひだ友の会ノ河合中学校(岐阜)ノ松本教会(長野)ノ甲府カトリック教会(山梨)ノ田子公民館、田子小学校(静岡)ノPHD鎌倉交流会、自主保育なかよし(神奈川)ノ全日本自動車産業労働組合総連合会、アユス(東京)ノまぶね教会(神奈川)ノ岡崎国際短期大学、トヨタ労組、豊田市国際交流協会(愛知)ノ国際ソロプチミストかかみ野(岐阜)

西日本研修旅行

めぐみ幼稚園、出水の農業を考える会(鹿児島)ノ水俣病センター相思社、浜元二徳氏(熊本)ノ下郷農業協同組合、下郷小学校(大分)ノ福吉伝道所、庄内町生活体験学校、祝町小学校、アジアを考える会北九州、東八幡キリスト教会、東郷信愛幼稚園、エフコープ、春日東教会、北九州YMCA(福岡)ノ下関丸山教会、梅光女学院(山口)ノ広島YMCA、久保清寛人氏、あやめ幼稚園、立正佼成会広島教会、広島県農業技術大学校、上下町公民館、上下小学校、三良坂小学校、日影館高校(広島)ノPHD鳥根県支部(鳥根)ノ備南ロータリークラブ(岡山)

15期生は、各地で暖かいご指導を受けながら、元気に研修に取り組んできました。2月中旬からは、現場での研修を終え、講義の研修を通じ1年間のまとめに取り組んでいます。また、水俣、筑豊、広島、釜ヶ崎を訪れ日本の社会の裏側についても学んできました。そこから、「発展」とい



高橋さんから洋裁を学ぶサビトリさん(三木市)

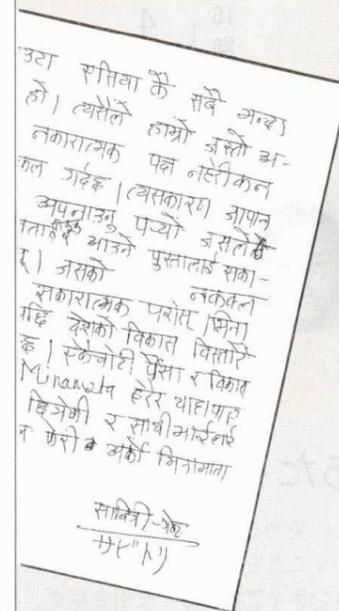
帰国研修生短信

ソロモン諸島のルーク・スイファシアさん(94年)から久しぶりの手紙。所属するパライ・コミュニティのプロジェクトや近況を知らせてくれました。

「97年には村の人たちが協力して新しい水道を作り、乾期でもパライと近辺の人たちは自由に水道を使うことができました。98年の目標は各家庭にトイレを作ることです。紙の作り方のワークショップは森林破壊をせずに収入を得るための良い試みでした。人口増加と資源、環境問題の中には、難しい問題もありますが、パライの人たちは開発のプラス、マイナス両面を理解しています。」

日本はアジアで一番発展している国です。私たちの国はこれからです。発展した国の良い所は見えやすいです。けれども、良くない所は私の国からは見えてきません。だから、ネパールの多くの方は日本の真似をしていただいたいと思っています。日本の人は、環境のこと、人間のこと、人間以外の動物のこと、次の世代のことを考えたほうがいいです。日本がそうしたら、私たちアジアの国の人が日本でやっていることをそのまま持って帰って真似をしても大丈夫です。

私は水俣での出来事を勉強しました。だから、自分の国が発展するのは、ゆっくりゆっくりのほうがいいと思いました。そして、お金や経済の発展だけで考えるのはよくないということがよくわかりました。ネパールに帰って友達やあちこちの人に話したいと思います。ネパールに水俣と同じような問題は欲しくありません。



『出会いが香りを生むために』

国内研修生 奥西 真幸

昨年の秋、韓国からの短期研修生(通訳)として来られた金聖淳さんのお話のなかでPHDの事務所に飾ってある詩の話が出た。その詩はザンビアの少年が岩村先生に贈った詩であり、そのなかに花が枯れた後もその花の香りは永遠に残るという一節がある。この詩は二人の出会いが生み出したものであり、このような人と人の出会いから生まれるものが永遠に残る香りではないかとその一節を中心に金さんは感想を述べられた。

出会い、これがPHD運動の始まりであり現在を支えている柱ではないかと私は金さんのこの話を伺うなかで考えた。

国内研修生としての6ヵ月間に私もPHDに関わって下さっているたくさんの方々に会うことができました。そしてその出会いが私に目を向けさせたものは自分の身近にあったものであった。金さんとの出会いがいつも事務所に飾ってある詩について、更に出会いについて考えるきっかけとなり、そしてアジアの研修生との出会いが知って

いるようで知らなかった日本の問題を学ぶきっかけとなった。水俣、筑豊、釜ヶ崎などの日本が経済的に発展していく過程で生み出した問題は私にとって歴史であり現在ではなかった。しかしそれらの問題は過去の出来事であるだけではなく現在のものでもあり、今まで何となく気づいていたにもかかわらず直視してこなかったものであった。

自分の生活や社会の中でなんか変だなとか変えたほうがいいのではないかと漠然と感じていたことでも直視して考える事はなかなか難しい。私の場合そのきっかけを与えてくれたのはアジアであり、アジアの研修生であった。

なぜ今まで見過ごしてきたのか、見よと見なかったのか、直視し始めた今何をすのか。そこから考えていきたい。原点に戻ってしまうようだが、そこから始めることがこの出会いを香りが放つものとする第一歩になると信じるから。

＜来日メンバー＞

- 金聖淳(キム ソンスン 団長、通訳、果樹)
林承八(イム スナル 稲作、野菜、山羊)
朴鍾九(パクチョング 稲作、野菜、山羊)
鄭一珉(チョン イルミン 野菜)
金東福(キム トボク 稲作、野菜、豚)
李乗成(イビョンソン 稲作、野菜、果樹)

来日ノ淡路島モンキーセンター(兵庫県洲本市)ノ山口勝弘氏(南淡町)ノ保田茂氏(神戸市)ノ一色作郎氏(市島町)ノ中野宗嗣氏(春日町)ノ「食と農を考える交流会」ノ京都大学農学部名誉教授飯沼二郎氏ノ神戸学生青年センター、日本基督教団兵庫教区社会部委員会ノ兵庫県有機農業研究会(神戸市)ノ食品公害を追放し安全な食べ物を求める会ノ信長たか子氏(宝塚市)



今年も、韓国(忠清南道洪城郡)の洪城正農会から有機農業の生産者を迎え、日本の生産者、消費者との交流を中心に行いました。

産業化が進み、農村の人口が減少していることをはじめ日本と韓国の農業を取り巻く状況には共通点が多く見られます。そんな中で、韓国では、有機農業であっても少量品目大量生産し、生協以外への出荷先を特別に得ることができていないのに、日本で訪問した農家では、畝ごとに違う野菜を植える多品目少量生産を実践していることが、特に深く印象に残ったようです。メンバーからは、自分が儲けるためではなく、環境と食べる人の健康のことを思い努力している生産者とそれに感謝し支える都市の消費者に出会ったことに勇気づけられたとの感想が届いています。帰国後も時々集まり、日本での経験を振り返っているそうです。

見学、講義、交流など、ご協力下さいました皆様に深く感謝いたします。ありがとうございました。

ゲオリ・カピンさん

(30才、女性)
パプア・ニューギニア
モロベ州マクワネン村
研修内容：保健衛生、農業

ルーテル教会開発奉仕部（LDS）の推薦で96年夏の15期ワニさん、ハリエオさんの面接時に同時に選ばれていました。ラニーさん（91年）以来PNGから2人目の女性。

サビトリ・バストーラさん

(19才、女性)
ネパール ポカラ
研修内容：編物、洋裁、保健衛生

ラダさん（83年）のグループからの推薦15期サビトリさんと同じ名前です。ちょっとややこしい。弟2人、妹、母親の5人家族。私立学校の校舎の2、3階に住んでいます。



新しい4人を
紹介します。
第16期研修生



退任にあたって

日本のNGOは1960年代に日本キリスト教海外医療協力会（JOCs）などがフロンティアの役割を担ってその活動を始めました。このJOCsから送られてネパールの辺境の地で国際医療協力を進められた岩村昇医師は、その意味で日本のNGOの草分けの働き人、つまりフロンティアであったと言えます。岩村先生を含め主として医療に携わるひとびとが日本のNGOにおけるフロンティアでありました。

1970年代の終わりから80年代初頭にかけてたくさんのNGOが誕生します。とくにラオス、カンボジア、ベトナムというインドシナ地域に、国際政治的、軍事的構想と不安定な事態が発生し多くの難民が生まれます。この非常事態に際し緊急救援活動が組織されそれらの団体、グループが継続的な国際協力活動を展開するために組織化を求められます。

私はNGOの第二世代はフロンティアを受け継ぎ、組織化を担っていったひとびとであると考えています。これをパイオニアと呼ぶことができるのではないかと思います。今このパイオニアのひとびとが日本のNGOの責任を担っています。しかしまもなくこの世代は21世紀を前に第三のNGO世代に一定の組織の安定性を形成し終え、引き継ぐ時にきていると考えることが望ましいと思います。私はこのパイオニアの世代のひとりとし

てこの愛するPHDを新しい体制に託していくことを決意しました。次の世代はフロンティアの「志」を引き継ぎ、パイオニアの形成した組織の中で、開発協力であり、環境であり、人権でありそれぞれに事業としての高い専門性を維持し、また組織の運営管理についても財政の運営管理についてもエキスパート、プロフェッショナルとしての役割が求められます。

いわばNGOとしての集大成をしつつその働きを担っていかねばならない訳です。これは相当大きな負担です。PHDの理解者、支援者としてのみなさまの忍耐と今までにもまして大きな支援が必要になります。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

私の退任時期は1995年ぐらいたるを目処にしていました。しかしご承知のように1995年1月17日に「阪神・淡路大震災」が起き、その日から1年2カ月は震災の救援活動に全力を傾注しました。PHD協会の理事会は私が代表となった「阪神大震災地元NGO救援連絡会議」に専従者として私を派遣して下さいました。それは震災で運営危機に直面しているPHD協会には激しい犠牲を強いるものでした。1千万円を超える財政支出に加えて、PHD協会の中核の人材を専従で送るといふ大きな決断をして下さった今井鎮雄理事長には今も大きな感謝を持って

プラチャク・ムアンチャンさん

(22才、男性)
タイ メーホンソン県スワンドク村
研修内容：農業

96年冬、15期アンボンさんと同時に面接を受けた彼、一年おいて選ばれました。タイ・カレン・バプテスト会議（TKBC）並びにプリチャーさん（85年）の推薦。

サワン・ナンタポーリスさん

(35才、男性)
タイ メーホンソン県バンペー村
研修内容：農業

同じくTKBC、プリチャーさんの推薦。プリチャーさん、アンボンさん、プラチャクさんたちとはお互い日常的に行き来ができる地域で農業をやっています。2児の父。

総主事 草地 賢一

います。大震災は178万人を越えるボランティアのうねりを被災地に生み出し、「ボランティア元年」という言葉も聞かれました。

その頃兵庫県立姫路短期大学などを再編し新たに姫路工業大学の中に新学部を設立する動きがありました。この構想の中に、ボランティアや国際理解、国際協力を取り入れ、大震災の支援を90以上の国や地域から受けた被災地からの発信をという意見があったようです。私もその新学部設置構想検討組織の専門委員として参加を求められ、それがきっかけになって1998年4月1日から発足する姫路工業大学環境人間学部の国際ボランティア論、社会活動フィールドワーク担当の教授として赴任することになりました。NGOのパイオニアとしての経験を基に今後は後進の人材養成の役割を担う場を与えて下さった神様に感謝しています。

84年11月から98年3月まで、キリスト者として私が祈り続けたことは「PHDの働きが神様から求められているのであれば人的にも財的にも支えてください」ということでした。そして文字通り神様は余りある程に支えて下さいました。

PHDを通して出合いを与えられたすべての皆様に心から感謝しています。

PHD NEWS

Table with 4 columns: Year, Month, Count, Amount. Summary: Total 1,152 items, 30,385,185 Yen.

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。65号でお願いした年末募金（会費を除く）12月、1月の集計で目標額1200万円を上まわり16,494,697円となりました。

皆様のご協力に心より感謝いたします。

ご支援に感謝申し上げます

昨年11月26日、東日本研修旅行の途上東京で自動車総連より福祉カンパをいただきました。同労組よりのカンパは今年で8年目となります。

また、アユス＝仏教国際協力ネットワークよりいただいているNGO人材支援事業助成金を、昨年に引き続き本年もいただけることとなりました。

両団体の継続したご支援に心よりお礼を申し上げます。

みなさんの1枚がこんなに

59号会報から呼びかけてきた使用済みのテレホンカード。96・97年度で実に24万5千枚——交換額は514,000円です。みなさんがそれぞれの場で声をかけて集めて下さった結果です。



PHDの新しい絵ハガキが出来ました。そしてその絵ハガキを事務所で袋づめしているのが私達ボランティアです。アジアの国々、そしてパプア・ニューギニアの子ども達の愛らしい表情について見とれていたら、8枚一組のセットが9枚入り7枚入になって、途中T職員員のデジタル計量器が活躍することもありま

ありがとうございました。なお、NTTによる使用済みカードの回収は2月で終了となりました。今後の引取先を探していますのでカードの回収はしばらく続きます。書き損じハガキやロータスクーポンも引き続きよろしくお祈りします。

新しい旅、つくりましょ

兵庫県三木市の教員、教育委員会職員6名による海外派遣団が2月8日から16日にかけて、ネパールを訪問しました。一行は二人の帰国研修生、ラダ・バンストラーさん（83年）、ニーラン・ガウチャンさん（85年）の協力を得て、国際理解教育の推進のため現地の学校・施設等を訪ねました。このような旅もご相談にのります。お尋ね下さい。

PNGの飢餓救援にご協力を

昨年よりの異常気象により干ばつにまわっているパプアニューギニアに対し、飢餓救援のため支援金を募っています。被害は特にハイランド地方でひどく、約120万人が飢餓の危機にあるとのことです。送金先は下記のとおり。

郵便振替 00110-4-417309
PNG救援キャンペーン
詳しくはパプアニューギニア干ばつ・飢餓緊急救援キャンペーン
担当パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会まで
(電話03-3492-4245)

した。私も旅先でよく絵ハガキを購入するのですが、袋づめする人の存在など今まで考えたこともありませんでした。一見、単調にも思える作業ですが、事務所に集まるいろんな方々とお喋りしながらなので楽しいものでした。「つるてん」（職員さん御用達のうどん屋さん）の向かいに住むYさんとはこの時に知り合いました。事務所に出入りして1ヵ月余りなのに、てきぱきと仕事をこなし、休憩中はお互い学生ということもあって話題は学校に関することです。また、土曜日の昼下がり、大きなバックを持っ

今年のスタディツアーはこれだ！

Table with 3 columns: Destination, Dates, Price. Includes Papua New Guinea, Laos, and Thailand.

〇月×日のPHD協会

職員 谷 淡水魚研修に同行。どじょう養殖の先生に、研修生が「どうじょ、よろしく」と挨拶。日本語の上達に感無量。

職員 藤野 お目にかかったことのある人に「はじめまして」と名刺を差し出し、当惑されること2度3度。しっかり——!!

職員 田中 急成長の一年。会報を作る編集ソフトにも習熟。しかし切羽詰まらぬとエンジンかからぬ一夜漬け女だそう。

職員 伊藤 事務所一のコンピュータ通。業務合理化のためシステムグレードアップの重大指令を受ける。むろん格安で。

職員 草地 理事会を前にカゼをひき「わたしは堪え性がないから」とお休み。しばらく、このフレーズ、はやる。

職員 小松 年明けは事業計画立案予算で連日遅くまで。超生真面目性格にはつらい時期。単純作業が実は大好き。

寝起きのいい順（推測）

て事務所に来られる1先生は職場である学校のお話が興味深いです。その他多くの方に袋づめのお手伝いをしていただいています。さらに、このレターが一番後ろのページには絵ハガキだけでなく新しいデザインのトレーナー等の写真も載せておりますので、合わせて御覧いただければと思います。 奇天烈

編集メンバー：大谷緑、大西緑、奥西真幸、木下まどか、安井佐織

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

かお
 たくさんの表情にあえる—

PHD絵ハガキ

新作・第5弾

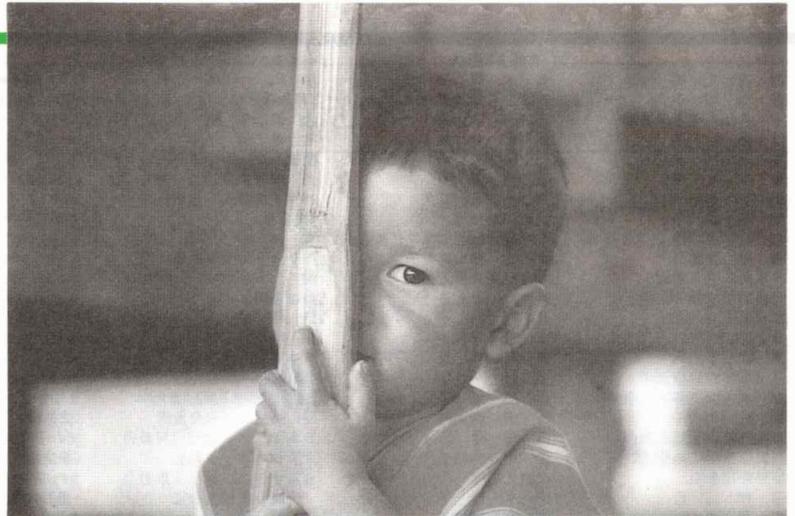
職員 藤野達也が1981年以来アジア・南太平洋で撮りためた写真の中から、ボランティアの人たちによる人気投票で選びました。PHDがかかわる国のうち、6ヶ国の農山漁村の子どもたちがテーマ。

好評のPHDオリジナル絵ハガキセット第5弾。

カラー8点1組 500円



インドネシア、西スマトラの漁村



タイ北部カレンの村



ネパール中部の山村



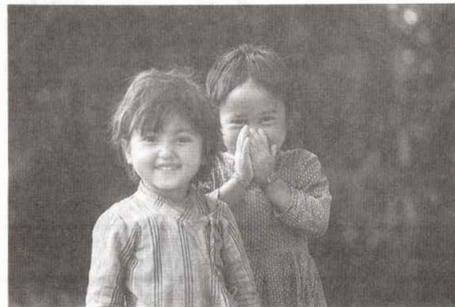
バブアニューギニア東部の漁村



スリランカ中部の農村



フィリピン、ネグロスの農村



ネパール中部の山村



フィリピン、ネグロスの農村



Tシャツ 1,500円
 トレーナー 3,000円

Tシャツ、トレーナーにも新しいデザインが登場

新デビューのトレーナー

製作元のビルボード社の提案による新デザインのTシャツとトレーナーが加わりました。
 好評の唐辛子シリーズも継続中。
 ちょっと大きめアメリカン・サイズ。

96-1 白地
 TシャツM・L
 トレーナー
 グレー地M・L
 紺 地M・L

97-2 黒地
 TシャツM・L
 トレーナーM・L

96-2 Tシャツのみ
 白地M・L

97-1 白地
 TシャツM・L
 トレーナーM・L

96-3 Tシャツのみ
 白地M・L

ご注文は、PHD協会まで

〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3、202
 電話 078-351-4892 FAX 078-351-4867

*代金は物が届いてから、同封の振替用紙で。領収書が不要の方はお知らせ下さい。
 *送料はご負担下さい。まとめて1万円以上お買い上げの場合、送料不要。